

氏名(本籍)	藤 ^{ふじ} 生 ^う 英 ^{ひで} 行 ^{ゆき} (東京都)				
学位の種類	博士(心理学)				
学位記番号	博甲第946号				
学位授与年月日	平成4年3月25日				
学位授与の要件	学位規則第5条第1項該当				
審査研究科	心理学研究科				
学位論文題目	教室における挙手の規定要因に関する研究				
主査	筑波大学教授	教育学博士	高野	清純	
副査	筑波大学教授	教育学博士	杉原	一昭	
副査	筑波大学教授		佐々木	俊介	
副査	筑波大学教授		中司	利一	

論文の要旨

(1) 本論文の構成

本論文は8章、本文386頁、引用文献10頁より成り立っている。

(2) 本論文の内容

第1章では、教室における挙手に関して、理論的な検討が行われ、自己効力、結果予期、結果価値の3要因が、挙手を規定する主要因であるとする仮説が設定された。この仮説のもとに、課題に対する応答に関する挙手と、意見の開陳に関する挙手の代表的場面として、それぞれ算数の授業と学級会が選択され、それらの場面での検討が、本研究の目的とされた。

第2章においては、挙手の意義についての教師と児童の考え方が調査された。その結果、教育現場で挙手は高頻度用いられていること、挙手する児童は高いコンピテンスを示すこととともに、学習が促進されると考えられている傾向のあることが明らかにされた。

第3章では、質問紙調査法による前述の主要規定要因と挙手との関連についての発達の検討が行われた。その結果、結果予期と結果価値も挙手を規定すると考えられるが、自己効力の影響が最も強いことが認められた。また、女子でのみ、学年の上昇に伴い自己効力が下降するという傾向が見出された。結果予期については、学年の上昇とともに負の結果に対する予期が増加する傾向を示した。さらに、結果価値については、性差、学年差はともに認められなかった。

第4章では、算数場面で刺激文を用いた検討が試みられた。自己効力は行動意図に影響するのに対し、結果予期と価値は交互作用によって行動を規定することが明らかにされた。3年生においてのみ結果価値が有意に作用しなかったのは、認知的操作能力の未熟のためと考えられた。次に、こ

の刺激文を用いた研究方法の妥当性が検討された。その結果、日常行動が反映されるとみなされる高自己効力、高結果予期、高結果価値の条件下で予期される挙手行動と、挙手状態についての仲間指名との間に有意な相関が見出された。このことは、刺激文を用いた研究方法が妥当であることを示唆しているといえる。さらに、刺激文を用いた研究法を改善するために、操作の有効性の確認と操作された場面の自然さについての判断項目と、予想される自己の挙手行動を問う項目が新たに付け加えられた。この方法を用いて、主要因の独立した効果が被験者間要因配置法によって吟味された。その結果、操作された3主要要因間には有意な相関は認められず、各要因が独立して操作されていることが確認された。また、3主要要因についての各操作は、挙手行動に影響することが見出された。さらに、操作された場面の親近性に統計的有意差はなく、操作が日常場面からかけ離れたものでないことが明らかにされた。

第5章では、学級会での検討がなされた。ここでもまた、3主要要因の操作は独立的で、挙手行動に影響していることが明らかにされた。本章での結果は、挙手を規定する要因が算数の授業と学級会の2つの異なった場面間にわたって、同様な役割を果たしていることを示唆しているといえる。

第6章においては、3主要要因以外の内的要因と外的要因が挙手に影響するかどうかについての検討がされた。内的要因としては、学業成績が取り上げられ、仲間指名得点によって定義された挙手行動との相関と、学業成績の影響を受け易いと考えられる算数場面での答の正誤認識と挙手との関係が、刺激文を用いて検討された。いずれの場合にも、学業成績は挙手に影響することが明らかにされた。他方、外的要因としては社会的地位、教師のリーダーシップ、学級の雰囲気、学級のモラルが取り扱われている。学級会場面での挙手と社会的地位との間には、有意な関連が認められた。また、教師と学級の要因は、主要規定要因への影響を通して、挙手を規定することが示唆された。そこで、主要規定要因、他の内的、外的要因と挙手との間の因果関係を明らかにするために、パス解析が行われた。その結果、主要規定要因以外の要因は、主要規定要因に影響を与えることによって、間接的に挙手を規定していることが確認された。

第7章では、実際の授業場面を用いて、前章までに解明された規定要因の影響についての再検討が行われた。そのために、実際の教室にビデオテープレコーダーを設置し、実際の挙手を観察しながら、質問紙の実施を行うという研究方法が採用された。分析の結果、算数の授業と学級会の両場面において、仮説的状况下で見出された結果と同様に、主要規定要因の挙手への影響が確認された。ただ、算数の授業では、正答率の低い発問に対する挙手は、自己効力に規定されているのに対し、正答率の高い発問に対する挙手は、結果予期と結果価値に規定されている傾向が強いという結果が得られている。また、外的要因としての社会的地位も、算数の授業と学級会の両場面において、挙手を規定する要因になることが見出されている。

第8章では、本論文全体にわたる考察がなされ、問題点と今後の課題について検討された。

審 査 の 要 旨

教育心理学には、研究方法が未開発か困難なために、必要でありながら、研究されていない領域や行動が少なからず残されている。教室での挙手は、授業にあたって、大多数の教師が有効な教育技術であると認め、利用しているにもかかわらず、教育心理学的に検討されていない代表的な行動の一種であるといえよう。本研究は、この未開拓の領域に本格的なメスをういた最初の研究であるといっても過言ではなかろう。著者は現在行動を規定する重要な概念と考えられている自己効力をまず取り上げ、さらに結果予期と結果価値という新しい概念を取り入れて、挙手が行われる理論的モデルを構成した。このモデルの検討は、最初、調査ないし実験的な仮設の状況下で行われたが、後に、実際の教室での検証に成功している。この研究では、独創的で、巧妙な手法が考案されている。それは、難儀ではあるが、今後の教室での研究に影響を与えるものと考えられる。

本論文では、内的要因として学業成績のみが取り上げられていて、性格や知能を始めとする他の要因は除外されている。外的要因についても、親の影響など取り上げる必要のあるものも少なくないと考えられる。それは、この論文の問題点の一つであるといえるかもしれない。しかし、少なくとも本研究で取り扱われた内的、外的要因は、主要規定要因に影響することを通して、挙手を規定するという因果関係を示唆している。この示唆は、上述の本研究の問題点を、少なくとも部分的には解消しているといえることができよう。また、現実の教室での研究方法には問題点がないわけではないが、その改善は、今後に残された問題といえよう。

よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。